DV 加害者に対する効果についての一考察？

～ある男性加害者の変化の過程の分析から～

田 中 寛 二

(琉球大学 法文学部)

キーワード：DV加害者更生相談，変化の過程，カウンセリングの効果

A process of change in counseling to a male DV batterer.

Kanji TANAKA

(Faculty of Law and Letters, University of the Ryukyus)

Key Words: counseling to a DV batterer, process of change, effect

目 的

DV加害者など違法行為を行った人たちのカウンセリングでは、来談意欲に乏しく、カウンセリングを夫婦関係の修復の手段と捉えてしまい、自らが抱える問題点の改善につなぐににくい傾向が認められる。そのために、DV行為の消失だけを目的とすると、表面的になってしまう傾向があるだろう。では、DV加害者へのカウンセリングの効果をどのように捉えれば良いのだろうか。そのような視点に立った研究はこれでのところ、とりわけわが国では行われていない。

そこで、本研究では、筆者が担当してDVの改善が見られたケースの分析を通して、DV加害者へのカウンセリングにおける効果について考察する。

方 法

1) 事例 TM (男性, 36 歳), 自営業, 妻とは 5 年前に旅行先でであって結婚した。妻には離婚歴があり, 連れ子 (6 歳女児) がある。TM の性格は, 短気ではあるが面倒見は良く, 社交的で, 兄貴肌の人柄。気分の変化が顔に出やすいタイプ。2) 経緯 妻が勤務先の親睦会に参加して, 帰宅が午前 3 時ころになった。そのことで口論となり, そして TM が妻に対して身体的な暴力をふるった (平手で顔を 2 回ほどたたいた)。その夫婦喧嘩がきっかけとなり, 妻が子どもをつれて友人宅に身を寄せ, 数日中にアパートを借りて別居生活が始まる。妻から TM に対して, 「こういう DV 行為をする夫は許せない。少しでも反省する気持ちがあるなら, 自分の DV を治してほしい, そのために DV 加害者のカウンセリングを行っている相談室に通うべきだ」という主旨のメールが送られてきた。そこで, TM は離婚の危機を回避するために, 来談する気になった。3) 相談回数 計 23 回 4) 面接者 犯罪臨床心理学を専門とする臨床心理士

結 果

面談と電話相談を合わせて 23 回相談を行った。

第 1 期 (#1～8) DV の否認から DV の承認

#1: これまでも DV かなと思うような言動があったのは確かなので, 妻に謝って戻ってきて欲しいが, 妻は離婚したいと言っている。自分は離婚したくない。DV の理由は妻の言葉がきつい (妻は弁が立つ) ことだ。妻がもう少し柔らかな言葉遣いをしてくれればいいのに・・・。

#5: DV をやめたいという気持ちになった。クールダウンもやりたいし, 自分が怒り始めるのも何となくわかるようになった。妻に電話をした。普通に話しをすることができた。妻から「結婚前から話し方が好きではなかった。声を聞くのも怖い。」と言われてショックを受けた。冷静に話したいのにそれができない。被害者の人たちはつながっていて, 自分だけ蚊帳の外に置かれている感じがして面白くないから, 身が入らない。他の相談所に通いたいと思う。

#8: 自分の言動が DV だったと分かった。妻には悪いことをしてしまったと思っている。

第 2 期 (#9～17) 妻との復縁のための DV 改善

#9: 保護命令を受けた。その数日後離婚調停が始まった。離婚の意思はないと伝えたが, 妻は離婚の意志が強いようだ。これまでの感謝の気持ちを手紙にして届けたが返事はない。
#10: 今は待つしかないのか。焦ってしまう。「うるさい」「だまれ」と大きな声で早口で言ってしまっていたが, それも DV の一部なんだとわかった。せめて電話が欲しいけど, 思うようにならない。希望が持てない, 死んでしまいたい。ふと妻子のことを思い出して涙が出ることがある。

#17: ひとりで心配なことを言葉にするようになった。そうするとスッキリする。妻の良いところ, 「はっきりものを言うところ」だが, 自分にとって面白くないことについてはっきり言われると腹が立ってしまい冷静になれなくなる。

第 3 期 (#18～23) 妻子との新しい関係の模索

#18: (唐突に) 離婚した。このままでは進展はないと思った。妻がこのままではかわいそうだと思った。土曜日までは離婚する気はほとんどなかったけども, 土曜日に考えて, 日曜日に離婚届にサインした。離婚して良い方向性を模索することができそうな気がする。

#19: 子どもに会えた。別の日に子どもたちを 1 日預かった。その時に長女これまでのことを素直に謝った。元妻から信頼や信用をしてもらえようになりたい。もっと頼られたい。頼られたら嬉しくて, ありがとうと言いたい。

#21: 離婚の前と後では随分違う。以前は落ち込みやすかったが, 今は元妻に普通に話をしができ, 子どもにも会える。安心するようになった。離婚したのは正解だと思う。子どもに会えないことが辛くてイライラしていたが, 今は落ち着いている。自分を変えなければと強く思っている。

#23: 調子は良好。子育ての援助も積極的で暴力的な面はほとんどないという。相談の最初の頃のことを思い出して, あのところはでたらめだったと思う。

考 察

このケースは, ほとんどのケースでそうであるように, 当初 DV を否認していた。それでも, 妻子との関係の修復を切望しているために来談や電話相談を続ける決意をしていたと考えられる。そのような納得できない気持ちから #5 で不満となって現れたのではないかと思われる。その際に, カウンセラーはより深い共感的な態度 (高野, 2010) で接した。そうすることが, DV 加害行為の要因となっている, 心理的な問題に直面化することにつながったと考えられる。その後は, DV 加害行為の消失 (それは, この加害者にとっては夫婦関係の修復を意味する) よりも自らの内面の問題点を見つめるようになり, 自己改善が進んだと考えられる。

このような改善こそ, DV 加害者を対象としたカウンセリングの効果と考えることが妥当と考えられる。

引用文献

高野嘉之 (2010) DV 加害者臨床における認知行動療法の理論と実践について 臨床精神医学 Vol. 39, No. 3, 287-300.